

北陸における弥生時代中期・ 後期の集落

The Settlement of the Middle and Late Yayoi Period in Hokuriku

安 英樹

YASU Hideki

- ① 序論
- ② 弥生時代中期の集落
- ③ 弥生時代後期の集落
- ④ 集落の遺構配置
- ⑤ 集落と地域
- ⑥ 結論

【論文要旨】

北陸の弥生集落については、全地域、全時期を対象にした研究が少なく、集落研究も活発とはいえない。本論ではこうした問題点の克服を目的とし、北陸の弥生時代中期と後期を中心として良好な調査事例を集成し、遺構の配置から集落の構造を検討した。また、地域の集落分布を加味することにより、集落間の関係性を追求した。これらの成果により、当時の地域社会について予察を試みた。

弥生中期は複数棟の住居で構成される集落が平野部に出現し、農耕集落の基本形態が成立する。中期前半は基本的な集落が形成されるが、環濠を持つA1類型の影響力がきわめて強く、環濠を持たないB類型に対して優位性を発揮する。中期後半はA1類型が衰退し、その要素が普及したA2類型となるが、B類型に対する優位性は低下する。

弥生後期は後期前半に大型住居が出現して住居が多様化することにより、中期とは一線を画する。さらに、後期後半から末にかけては、倉が大型・多棟化したB2・B3類型が段階的に出現し、集落の性格が重層化していく。この段階ではA類型よりも倉が発達したB類型が優位性を発揮するようになり、地域の社会共同体を主導する。

弥生中期は環濠の有無が、弥生後期は大型住居と倉が重視されており、地域の集落を編成する原理が変化している。A1類型の集落が弥生時代の文化形成を主導する弥生中期社会から、比較的同質的な社会共同体が群在する弥生後期社会へと変化するのである。

【キーワード】 中期、後期、環濠、大型住居、倉、類型

①……………序論

(1) 問題提起

昭和後半期に開発行為を原因として発生した大規模な遺跡の発掘調査、例えば石川県では昭和46～48(1971～1973)年に行われた金沢市塚崎遺跡〔栃木1999など〕のような集落全域に及ぶ発掘調査の成果は、それまで推測でしかなかった集落の全体像を私たちに見せつけるものであった。その功罪はともかく、具体的な集落の規模、遺構の配置、時間的な変化などが解明された貴重な事例の増加とともに北陸地方における弥生時代の集落研究は進んできたが、私は現状を以下の三点のように認識している。

第一は、弥生時代を通しての時間的な変化がわかりにくい点である。集落の事例には弥生時代後期から古墳時代前期の時期が圧倒的に多く、かつ弥生時代中期以前の事例が少なかった事情から、前者の時期に研究が集中し、比較・検討が進まないまま、分断された状況といえる。

第二は、北陸という地域全体の様相がわかりにくい点である。確かに発掘調査事例は全域で増加したが、一定の空間領域内に分布する集落を対象にした研究は県・市・町・村といった現代行政区域の枠を超える事が難しく、結果として限定的な範囲を扱った事例が多い。

第三は、第一・第二とも関係して集落理論が未発達な点である。例えば、住居など個別遺構の研究は活発だが、集落そのものを扱った研究自体が少なく、環濠集落、中核集落、拠点集落、防御的集落、高地性集落といった異なった概念が乱立・複合している。

以上から、北陸地方における弥生時代の集落研究には、北陸という地域全域と、弥生時代の全時期を対象とする視点が基本的に不足していることが問題点として理解できよう。それが集落理論の発達を阻害する一因となっており、結果として当時の地域や社会の考察を困難にしている可能性がある。

(2) 目的と方法

本論文は、北陸地方における弥生時代の集落について、北陸という地域全域と、弥生時代の全時期を対象とする視点を確立することを目的とする。そのため、まずは北陸の弥生時代集落の良好な調査事例を集成する。次いで、概念にこだわらず遺構の配置から集落の構造を検討する。また、地域の集落分布を加味することにより、集落間の関係性を追求する。これらの作業から、北陸における弥生時代の集落の状況を時期別に比較し、その変化を把握することに重点を置く。そして最後に、当時の地域社会について予察を試みたい。以下、文中では個人名に敬称を省略する。

対象とする地域は西から福井県、石川県、富山県、新潟県の4県域とする。対象とする時期は弥生時代の中期と後期を中心とし、前期以前と古墳時代については参照するにとどめる。時期区分は報告書抄録集成の編年表(本誌18～19頁参照)に準拠し、中期を前半と後半、後期を前半、後半、末と表現する。中期前半と後半、後期前半については必要に応じてそれぞれ1期・2期の細分を示す(表1)。集成の対象とする集落は、一定規模の発掘調査が行われて規模・構造が明らかになっており、かつ、報告書が刊行されているものとした(図1)。ただし、その条件を満たす事例は少

数で所在地も偏在することから、それら以外でも、検討に有効な事例は積極的に引用している。なお、引用する遺跡名については、初出時に県・市町村名を示すが、次出以降では基本的に省略とする。

集落を構成する遺構のうち、住居については低湿地に対

応した平地建物と乾燥地に対応した竪穴建物の別を認識している。ただし、平野部では浅い竪穴の事例や後世の削平を考えると、区別が難しい場合がある。本論では竪穴部が確認されたものを竪穴建物、確認されなかったものを平地建物と単純に区分した。倉については住居が前述した状況で確認された場合、並存する掘立柱建物を認識した。通常の柱穴検出による掘立柱建物の他、長軸方向の柱筋に溝をもつ布掘建物を区別できる。なお、引用する遺構名・番号については出典のままとする。

表1 時期区分

	本論文	報告書抄録編年表	安・山口2005		
弥生	前期	—	I期		
	中期	前半	1期	八日市地方3~5期	II期
			2期	八日市地方6~8期	III期
		後半	1期	八日市地方9~10期	IV期古
			2期	戸水B	IV期新
	後期	前半	1期	(+)	V期古
			2期	猫橋	V期中
		後半	法仏	V期新	
			末	月影	庄内式古
	古墳	前期	前半	白江	庄内式新
古府クルビ				布留式古	

②……………弥生時代中期の集落

(1) 分布概要と集成状況

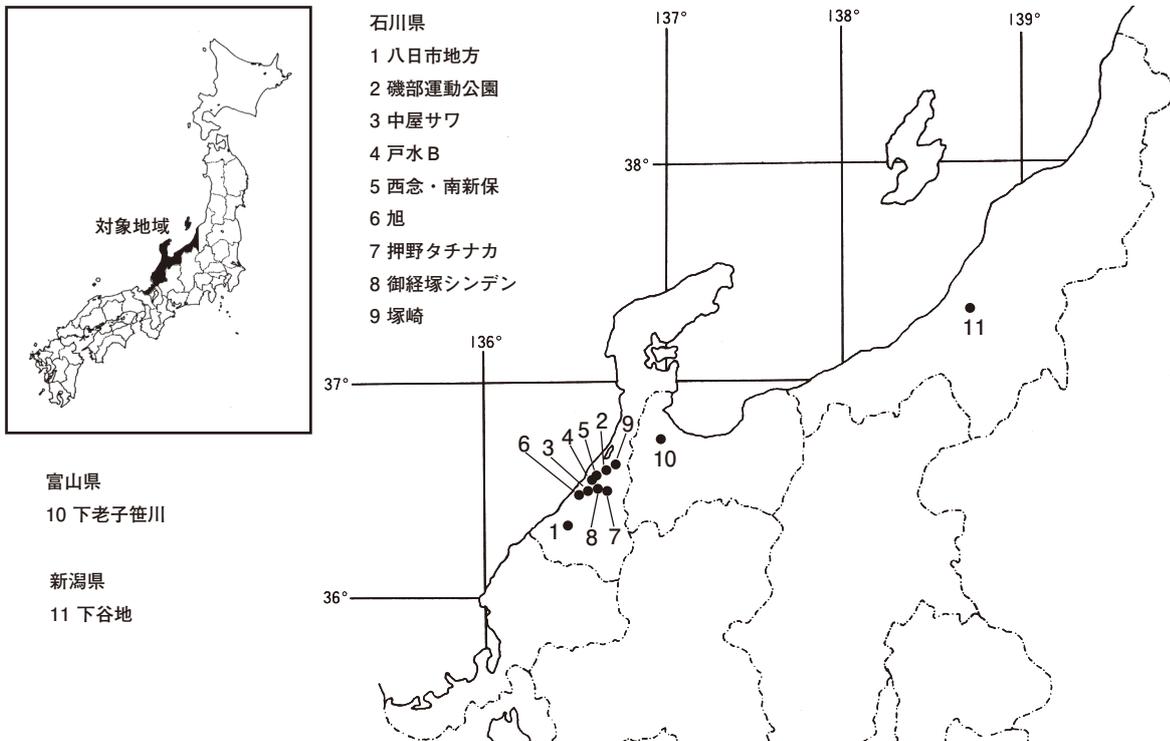


図1 対象地域と代表的遺跡 (S = 1/400,000)

分布の傾向として、中期前半1期は遺跡数が少なく、遺構が確認されることも希で、集落の実態が不明確であるという前期からの特徴を継続している。この段階の集落として明示できるのは、石川県小松市八日市地方遺跡や、同県の羽咋市吉崎・次場遺跡など、北陸南西部でごく少数にとどまる。中期前半2期は住居を含む遺構の確認例が増え、集落の増加が見込まれる。分布は富山県高岡市石塚遺跡、新潟県柏崎市下谷地遺跡など、北陸北東部まで拡大する。中期後半1期は消長が激しいが、継続、廃絶、新出の結果として集落は増加し、中期で最も分布が密になる。中期後半2期はこの傾向が維持されず、集落は減少していく。以上のような集落分布は中期前半1期の「点」から中期前半2期の「線（幹）」、さらに中期後半1期の「面（枝）」へ変化するように理解している（図2、中期後半2期については集落の減少を十分に評価できなかったので表示していない）。

代表的遺跡として、以下に提示する5遺跡を集成した。5遺跡中4遺跡が石川県の南西部に位置し、うち3遺跡は金沢市に所在する。のこり1遺跡は新潟県である。なお、5遺跡中3遺跡で環濠が確認されているが、環濠をもつ集落が主体と判断できるわけではない。例えば、金沢市戸水B遺跡に近接して同時期の藤江C遺跡や西念・南新保遺跡などでは環濠が確認されていない。各遺跡で示す項目の凡例は以下のとおりである。

- ①集落の所在地（県・市町村） ②集落の立地 ③遺構面の標高 ④集落の時期 ⑤集落の規模
⑥遺構配置の概要 ⑦その他特記事項]

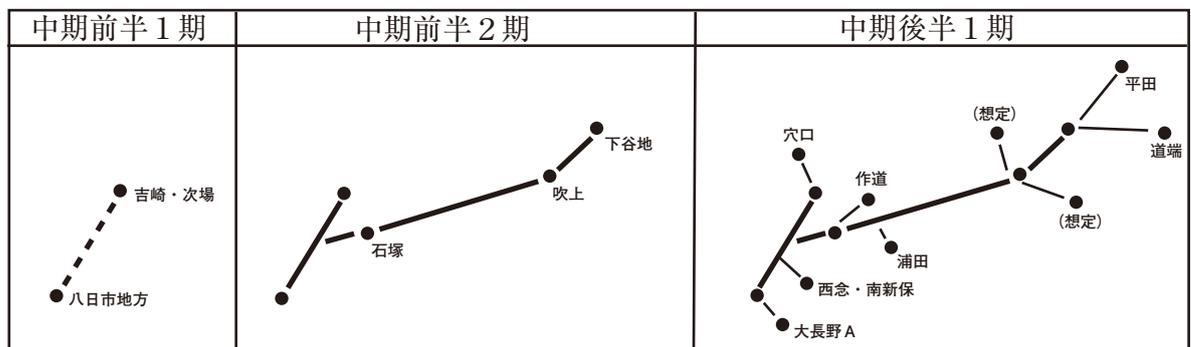


図2 弥生時代中期の集落分布模式図

(2) 代表的遺跡

八日市地方遺跡（図3）

①石川県小松市。②平野。③約1m。④集落としては中期前半1期～後半1期。⑤約150,000㎡。⑥河川の両岸に環濠，河川と環濠の間に居住域と墓域が複数配置されている。集落は中期前半1期に基本的な配置が成立し，中期前半2期に規模を著しく拡大し，それを維持して中期後半1期まで存続する。南岸域の調査が進んでおり，居住域の遺構密度は高い。墓域には中期前半2期から方形周溝墓が出現する。ただし，現状では河川を除く大半の遺構・遺物が未報告であり，詳細な検討が難しい問題がある。⑦弥生時代中期では北陸を代表する集落である。河川から多量・多彩な遺物が出土したことで広く知られている。

下谷地遺跡（図4）

①新潟県柏崎市。②平野。③約4m [高橋他1987，詳細不明]。④中期前半2期。⑤約40,000㎡。

八日市地方遺跡 (河川南岸域のみ、墓域と居住域は中期前半2期のものを表示)

(報告書 pp19-20 に加筆)

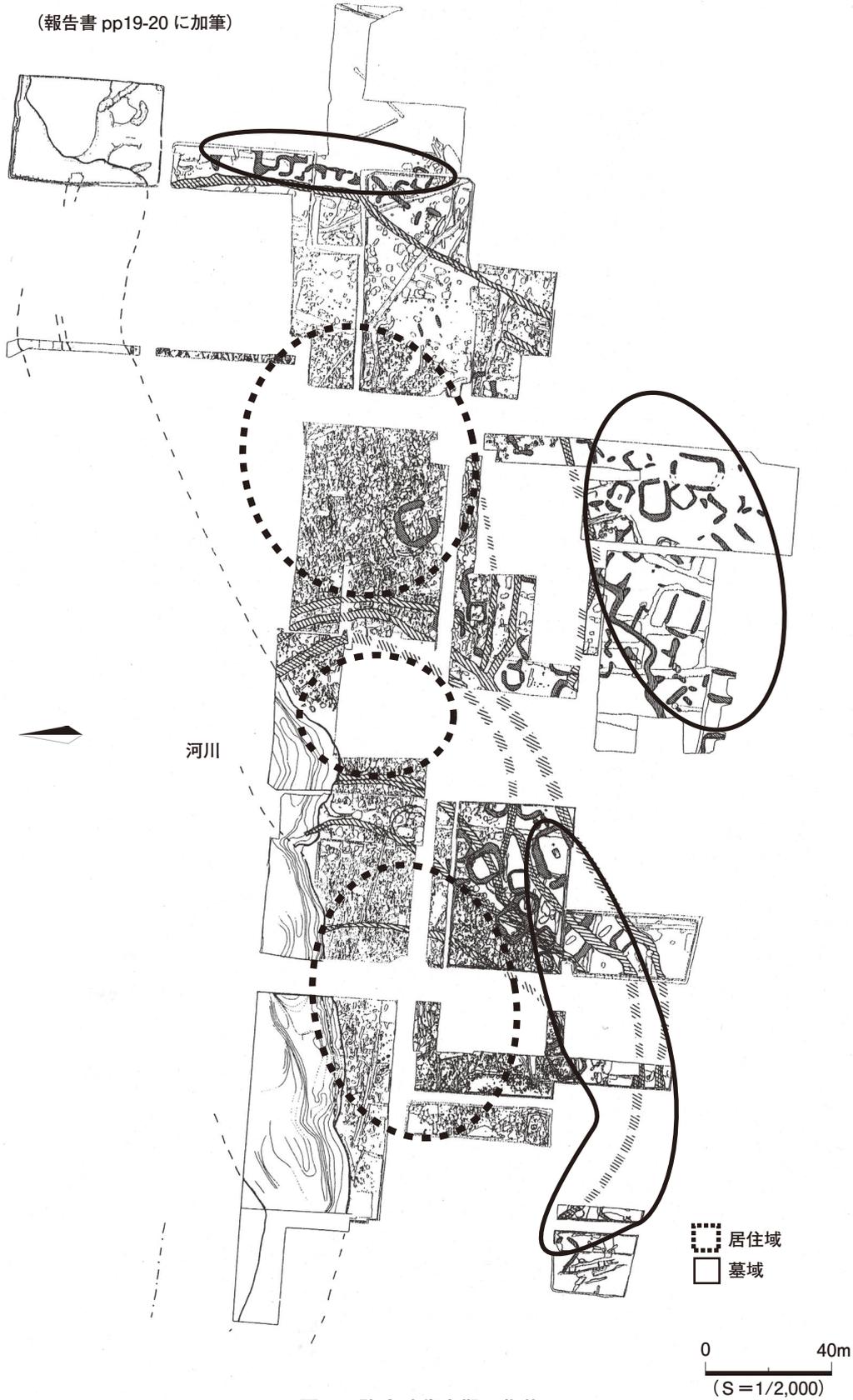
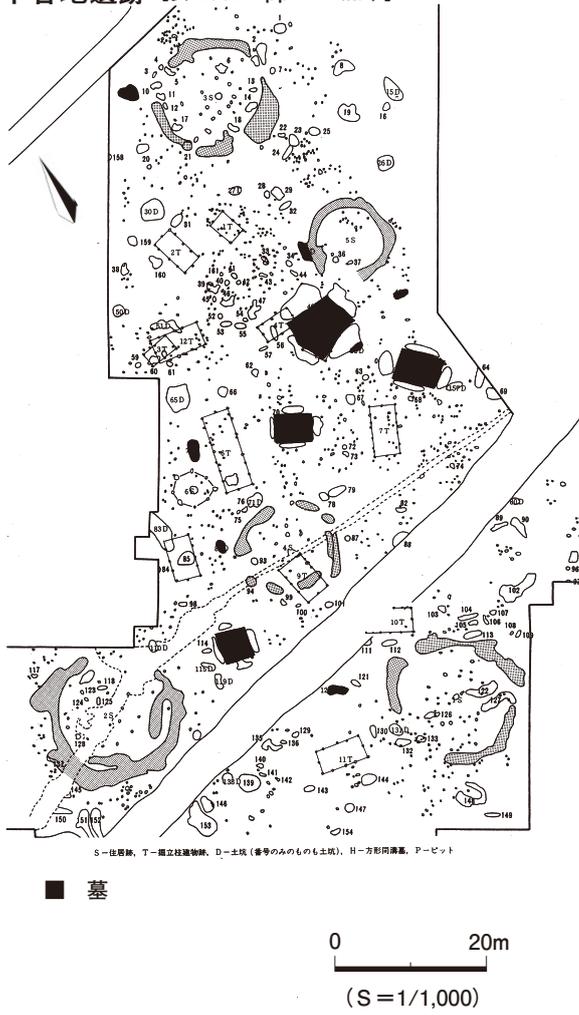
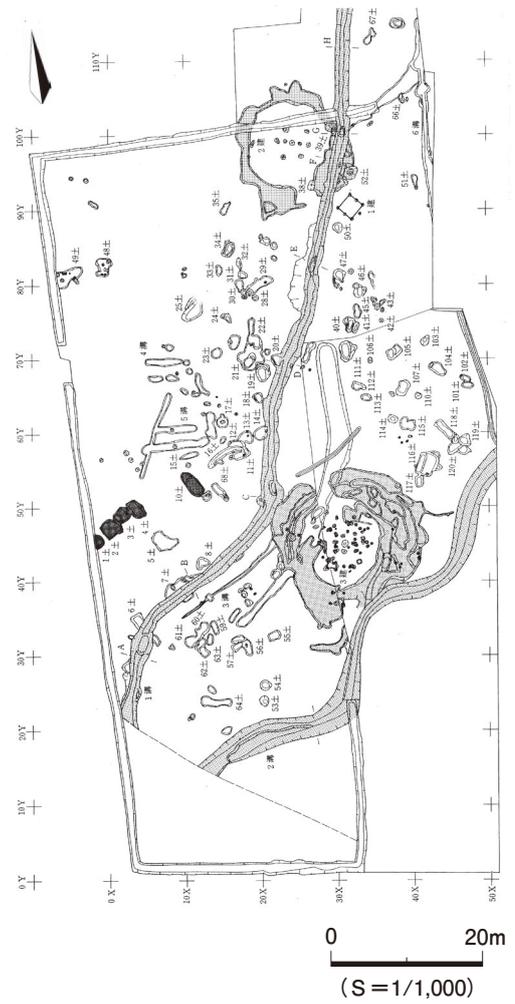


図3 弥生時代中期の集落 1

下谷地遺跡 [安2002 pp14 に加筆]



磯部運動公園遺跡 [安2002 pp10 に加筆]



中屋サワ遺跡 [報告書 pp218 に加筆]

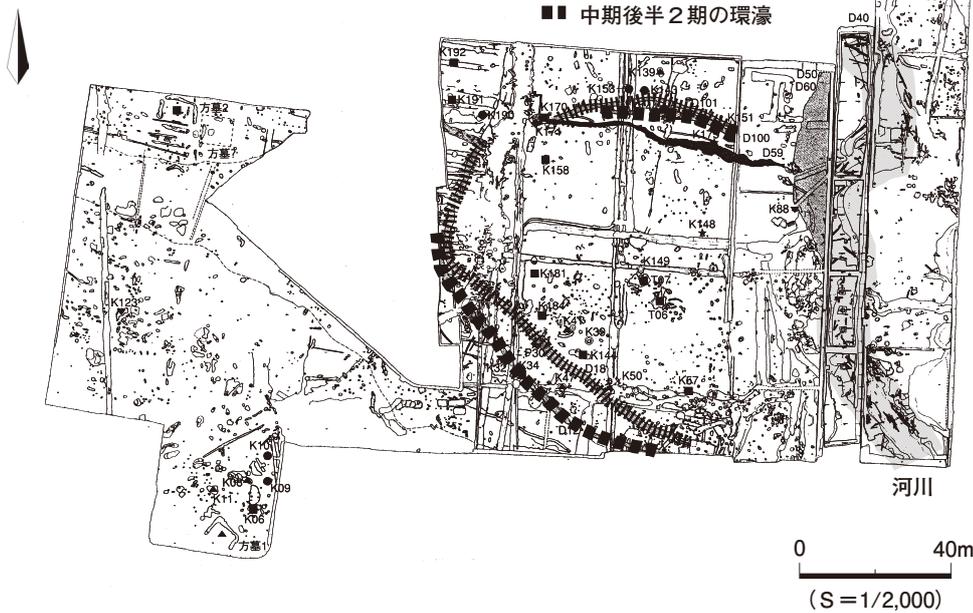


図4 弥生時代中期の集落2

戸水B遺跡 [安 2005 pp27 に加筆]

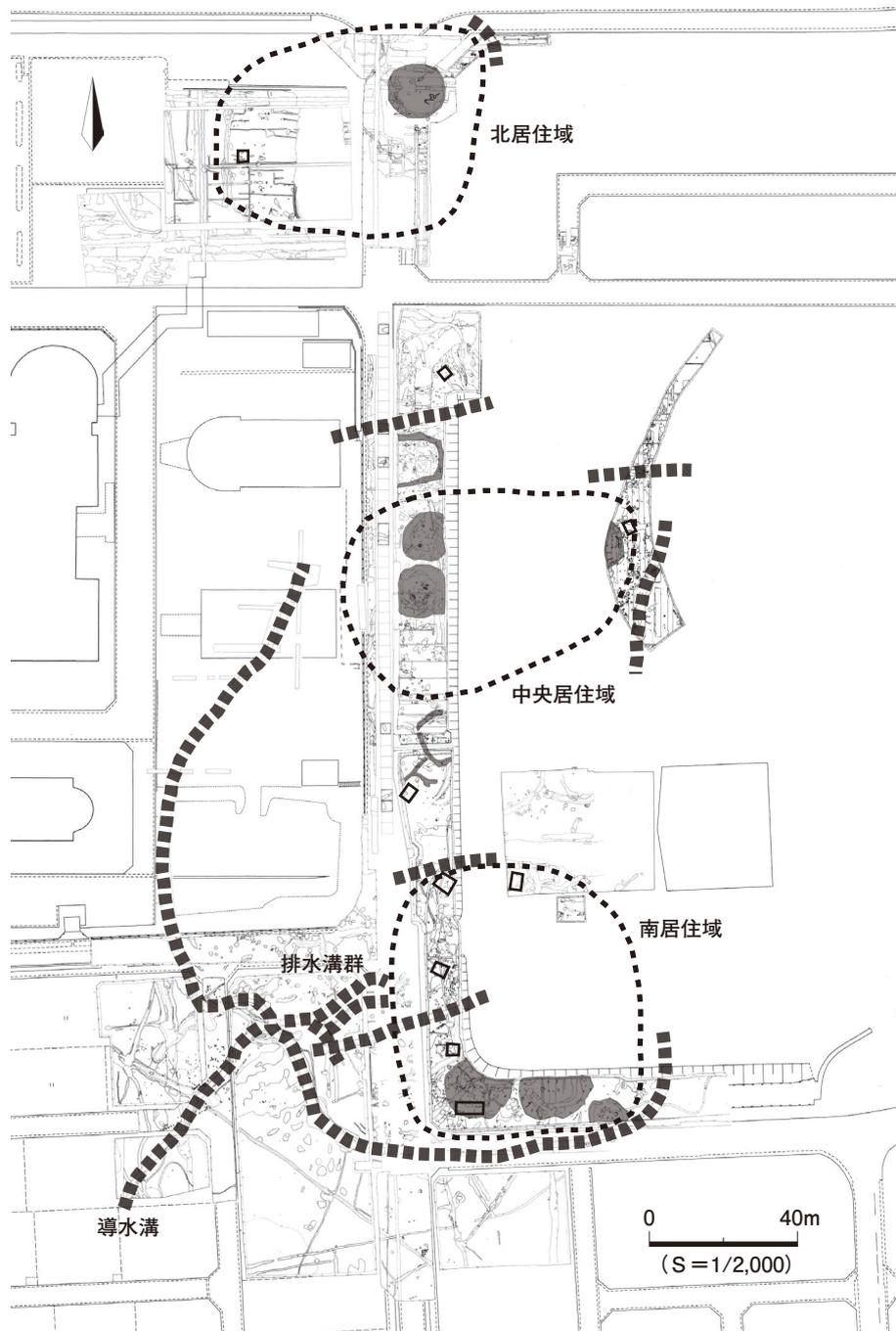


図5 弥生時代中期の集落3

⑥複数の住居（平地建物），倉（掘立柱建物），方形周溝墓，土坑墓が近接した配置をとるが，全体に重複が少なく，同時存在したものが多くと推定できる。長棟の掘立柱建物はこの段階の北陸では異質であり，機能については保留しておく。渡邊裕之は中期前半1期以前との系統的な断絶を指摘している〔渡邊 2005〕が，縄文時代ないし東日本の系譜に連なる可能性は否定できない。⑦全域が調査されたとはいえないが，北陸北東部ではこの時期の遺構配置が明確な集落の好例であり，集成に加えた。玉生産集落としても広く知られている。

磯部運動公園遺跡（図4）

①石川県金沢市。②平野。③約3m。④中期前半2期～後半1期。⑤規模不明。⑥1985・1986

年度調査区では住居（平地建物）、倉（掘立柱建物）、土坑墓群、土坑群が検出されている。溝と住居は重複関係にあるが、出土土器から判断して多くの遺構は同時性が高い。2棟の住居のうち1棟に倉が隣接して位置する。土坑墓は形状から木棺墓の可能性がある。土坑群は住居に挟まれる位置のものは土器が多く出土しているが、住居の外縁に位置するものはほとんど遺物が出土していない。⑦全域が調査されたとはいえないが、各種遺構の良好な配置例であるので、集成に加えた。

中屋サワ遺跡（図4）

①石川県金沢市。②平野。③約8m。④中期前半2期～中期後半2期。⑤約9,000㎡（環濠の範囲で計測）。⑥河川の西岸に環濠、その内側で建物や土坑等、外側では方形周溝墓2基等の遺構が検出されている。概ね環濠内部が居住域で、外部が墓域と想定されるが、後世の削平が激しいため、建物の構造や正確な配置については不明な部分が多い。なお、調査報告は環濠の掘削を中期前半2期としている〔楠2007〕が、私は出土遺物や周辺の遺構分布を見る限り、中期後半1期の掘削、中期後半2期の再掘削と理解している。⑦小規模ではあるが、前述の八日市地方遺跡以外で環濠と方形周溝墓が組み合わさる注目すべき事例である。

戸水B遺跡（図5）

①石川県金沢市。②平野。③約3m。④中期後半1期～2期。⑤約50,000㎡。⑥公称13次に及ぶ虫食いの調査であるが、広域で遺構の配置を確認している。環濠内側に住居（平地建物）と倉（掘立柱建物・布掘建物）で構成される居住域が複数確認されている。環濠は集落外の河川から導水、集落内の溝から排水されており、水路的な性格を兼ねる。近接する住居には出土土器に時間差が見られ、並存するものではない〔安2005など〕。墓域については確認されていない。⑦遺構の時期を中期後半にほぼ限定できる集落の好例である。

③……………弥生時代後期の集落

(1) 分布概要と集成状況

分布の傾向として、後期前半1期は中期後半2期の傾向が加速し、遺跡数が極端に少なくなり、中期の集落は大半が廃絶するか断続する。この段階の集落として明示できるのは、資料が多い石川県域でも西念・南新保遺跡のほか、金沢市上安原遺跡、加賀市猫橋遺跡など限定的であり、他県域ではほとんど資料がない。後期前半2期は遺跡数がまだ少ない状況下ではあるが、再び確認できるようになり、集落が回復傾向を示す。後期後半は遺跡数が急激に増加する。石川県での状況であるが、中期後半1期を超える頻度で集落が増加しており〔安・山口2005〕、他県でも同様と推定する。後期末はこの遺跡数が維持されるが、古墳時代前期からは減少が始まる。集落も維持から減少に転じる。以上のような集落分布は中期後半に形成された「面（枝）」が衰微の段階を経てさらに密な「面（網）」になるものと理解している（図6）。また、山地・丘陵への進出が顕著なことにも注目すべきであろう。

代表的遺跡として、以下に提示する6遺跡を集成した。6遺跡中5遺跡が石川県の南西部に位置し、うち5遺跡は金沢市周辺に所在する。のこり1遺跡は富山県である。弥生時代中期と比べると調査

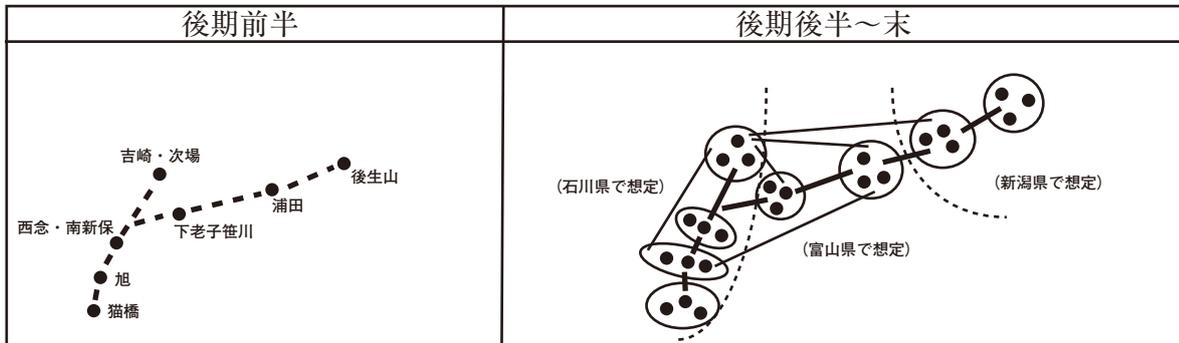


図6 弥生時代後期の集落分布模式図

事例は多いが、集成の条件を満たす内容の集落は決して多くない。各遺跡で示す項目の凡例は弥生時代中期と共通である。

(2) 代表的遺跡

西念・南新保遺跡 (図7)

①石川県金沢市。②平野。③約4m。④集落としては中期後半1期～後期後半。⑤約40,000㎡。⑥中期後半から長期間継続する集落であるが、後期前半には河川の東岸に環濠が形成され、区画溝とともに複数の居住域と墓域が配置される。後期後半には居住域は維持されるが、墓域は消失する。遺構が錯綜しており、居住域の具体的な構成は明らかでないが、複数の住居（竪穴建物が主体）で構成され、倉（掘立柱建物）は基本的に集落南側の居住域に伴う。後期末には環濠が埋没し、居住域も大きく北へ移動することから、それ以前と同質の集落とはいえない。⑦弥生時代後半期では北陸を代表する集落の一つである。豊富な木製遺物が出土したことで広く知られている。

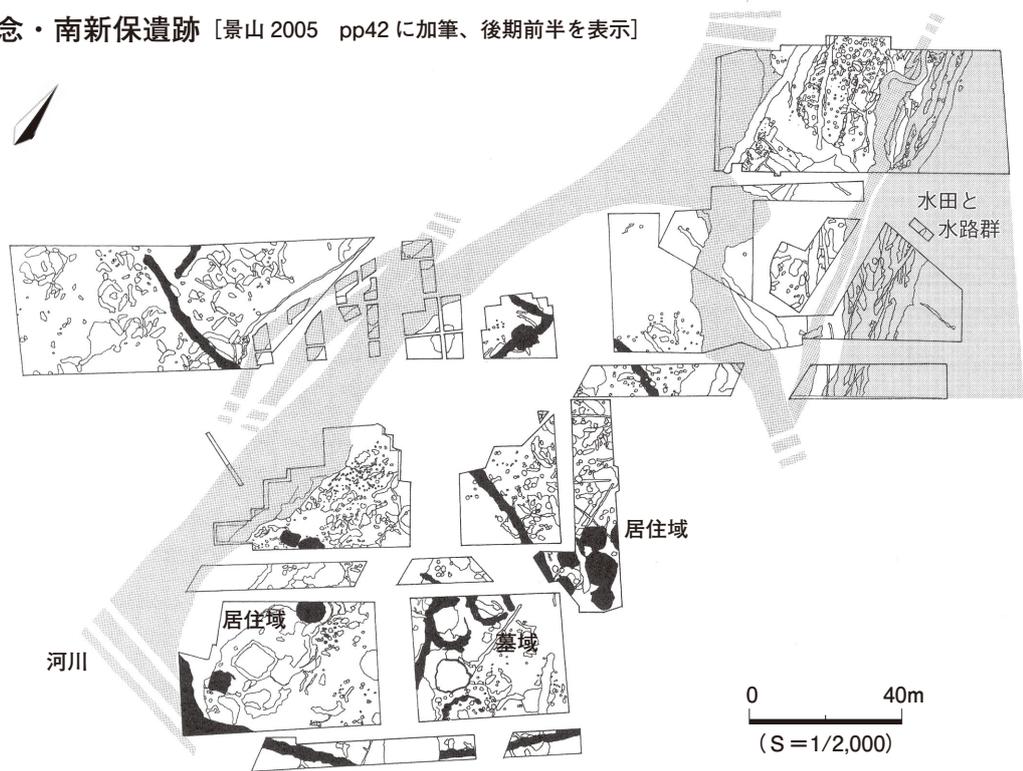
旭遺跡群 (図8)

①石川県白山市。②平野。③約7m。④集落としては中期後半2期、後期前半2期～後期末。⑤南北端が確定していないが約40,000㎡を想定。⑥集落としては中期後半2期に成立するが、後期前半2期に規模を拡大し、多数の住居（竪穴建物）で構成される居住域を南北に設ける。後期後半には北部の墓域化が始まり、後期末には墓域が主体となる。住居には大型住居が含まれ、居住域は各段階でさらに小単位区分が可能である。倉（掘立柱建物）は南北の居住域に伴うが、住居に対してごく少数である。⑦「旭遺跡群」は北から一塚、旭小学校、宮永の各地区を総称したものである。一塚地区は後期末の四隅突出墓、古墳前期の前方後方墳で広く知られている。

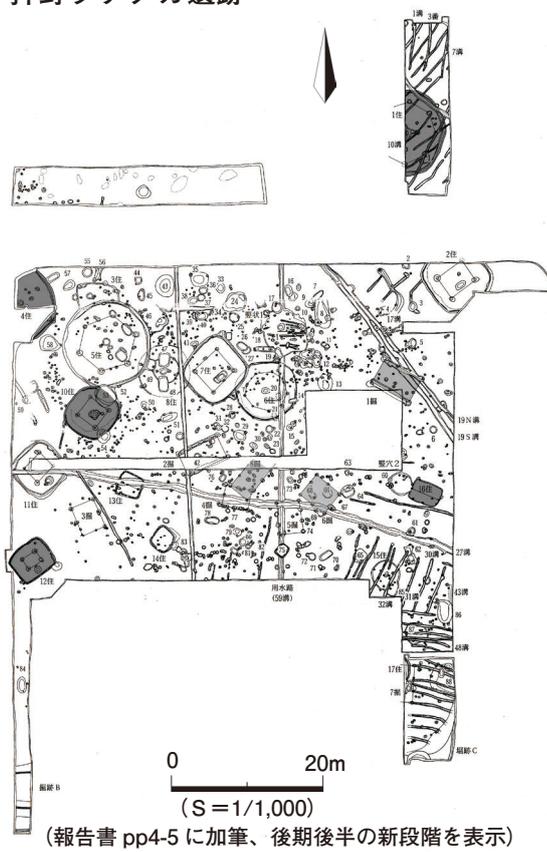
下老子笹川遺跡 (図9)

①富山県高岡市。②平野。③約18m。④縄文晩期～弥生中期前半1期、後期前半2期～後期末。⑤約30,000㎡（生産域を除く）。⑥遺構が洪水堆積に覆われて良好な状態で遺存しており、周堤をもつ住居や集落を構成する簡易な建物、道や柵などの施設、畑や水田といった生産域が確認されている。本格的な農耕集落は後期前半2期に成立するが、後期後半に規模を拡大し、東西に居住域を設ける。居住域は多数の住居（竪穴建物）と倉（掘立柱建物）、小屋等の建物で構成される。居住域の南には生産域として畑が確認されている。後期末は居住域が南へ移動し、規模が縮小する。居

西念・南新保遺跡 [景山 2005 pp42 に加筆、後期前半を表示]



押野タチナカ遺跡



塚崎遺跡 [栃木 1999 の後期末最終段階を表示]

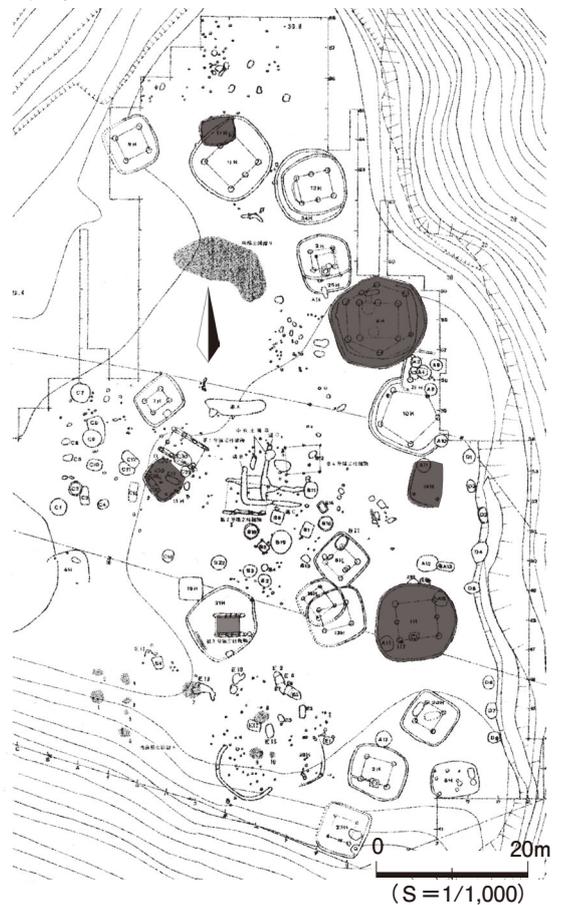


図7 弥生時代後期の集落 1

旭遺跡群 (報告書 I -pp12・II -pp3・III -pp3 に加筆、後期前半2期を表示)

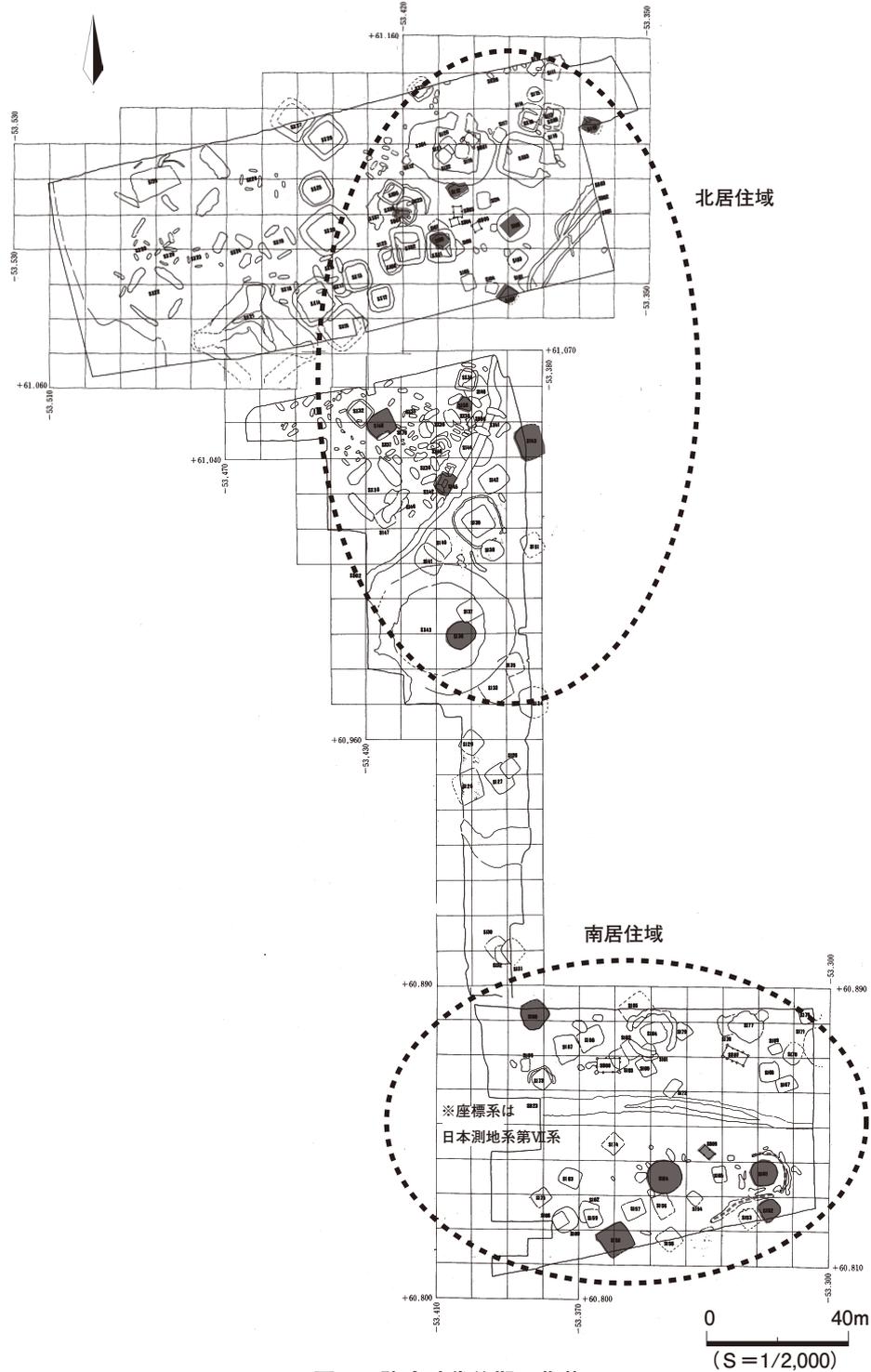


図8 弥生時代後期の集落2

住域の北には生産域として水田が確認されている [岡本 2006b]。⑦具体的な集落の景観を知ることができる特筆すべき事例である。

押野タチナ力遺跡 (図7)

①石川県野々市町。②平野。③約 14 m。④中期後半1期, 後期後半~末。⑤約 20,000m²。⑥後

御経塚シンデン遺跡 (後期末の中段階を表示、古墳前期の墳墓群は非表示)
 (報告書 pp46 に加筆)

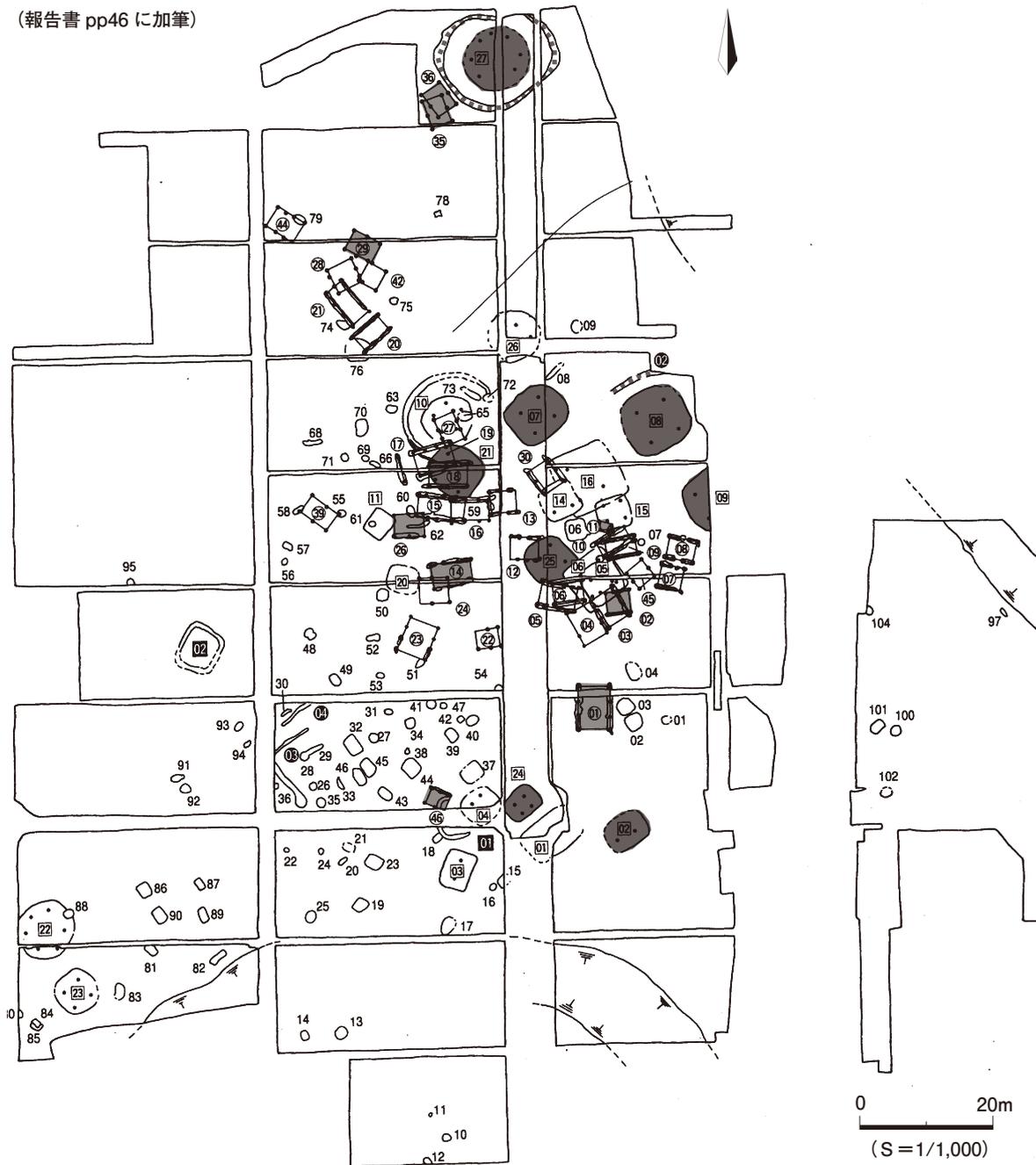


図10 弥生時代後期の集落 4

期の集落は大型から小型まで多様な大きさの住居（竪穴建物）とその間を埋めるように倉（掘立柱建物・布掘建物）が配置される。布掘建物は少数ながらやや大型である。この組み合わせは後期後半～末をとおして維持される。⑦全域が調査されたとはいえ、調査区も北半部や南端部は未報告であるが、各種遺構の良好な配置例であるので、集成に加えた。

御経塚シンデン遺跡 (図10)

①石川県野々市町。②平野。③約11m。④後期後半～古墳前期前半。⑤約20,000㎡。⑥集落は後期後半に成立するが、後期末が最も遺構が多く、中心時期となる。古墳前期前半には規模が縮小し、

墓域が発達していき、最終的には大規模な墓域となる。後期後半～末にかけては居住域が3群程度に分散しており、中央の群では住居（竪穴建物）と同数以上の倉（掘立柱建物・布掘建物）が存在する。また、倉35棟（SB42は削平された住居の可能性があり除く）中に布掘建物が24棟と多い。⑦後期末を中心時期とする集落の好例である。

塚崎遺跡（図7）

①石川県金沢市。②丘陵。③29～32m。④後期後半～末。⑤約6,000㎡。⑥住居（竪穴建物）多数、倉（掘立柱建物・布掘建物）、貯蔵土坑群等で居住域を形成する。集落が成立した当初は大型住居が未見であるが、後期後半のうちに出現する。遺構の変遷については複数案が存在する〔吉岡1978、小嶋1992、栃木1999〕が、出土土器や遺構の情報が不足して時期を特定できない住居の見解が分かれる以外は大筋で一致する。⑦丘陵部に立地する集落のほぼ全域を調査した事例として、今もなお貴重な存在である。

4……………集落の遺構配置

(1) 住居の変化

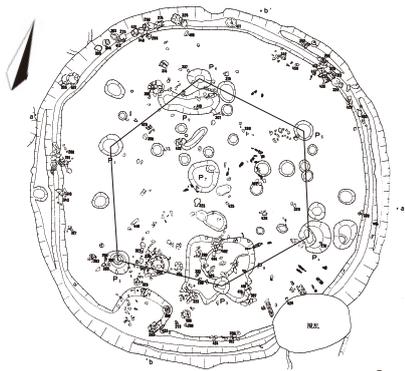
北陸の弥生時代集落を構成する要素の中では、住居をはじめとする遺構の個別的研究については検討の蓄積と一定の成果がある。住居については、その規模、平面形、主柱配置の類型や時間的変化がほぼ把握されているとよい〔岡本2006aなど〕。よって、弥生時代集落の遺構配置を論ずる前にまず、住居の変化について概観する。

弥生時代前期には明確な住居の確認例は皆無に等しい。富山県下老子笹川遺跡等に見られる小規模で浅く柱穴も不明確な竪穴建物、平面亀甲形の平地建物はこの段階の住居となる可能性が高いが、縄文時代のもので大きく変わるところがない。比較的簡易な構造の建物であり、集団の定着性が低いことを示すものと考えられる。

弥生時代中期には明確な住居が、外周溝をもつ平地建物（平面円形か多角形、多主柱）という特徴的な型式で出現し、以降の低湿地に立地する集落では住居の主流となる。その起源については明確でないが、列島各地の形態差を見る限りでは、一元的に求めることは難しい状況である。時期は金沢市戸水C遺跡SI1001～1005などが中期前半1期以前に遡る可能性があるが、出土土器が少量・小破片であることと、検出が困難な状況下で形状に不確実性が残ることから、判断を保留しておく。中期前半2期は事例も多く、白山市野本遺跡（1994年度調査区）では竪穴建物も確認されており、住居の確実な出現を求めることができる。中期後半1期は白山市相川新遺跡（1997年度調査区）第2号竪穴住居跡などで平地建物と共通する柱配置の竪穴建物が確認されている。これ以降、平地建物と竪穴建物は構成要素の多くを共有するようになる。中期後半2期は戸水B遺跡SI12002・12003など、平面四角形・4本主柱のものが加わっている。規模については、竪穴部分が確認されない平地建物では算出しにくい、明確な大型住居は確認されておらず、規模の差は比較的小さいものと推定する。

弥生時代後期には大型住居が出現する（図11）。後期前半1期では集落の確認例そのものが少な

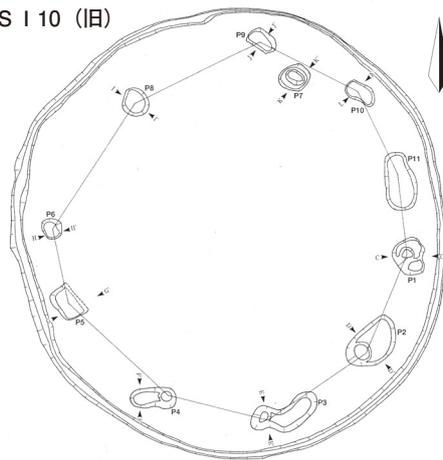
旭遺跡群 S I 64



(報告書Ⅲpp23-24 に加筆)

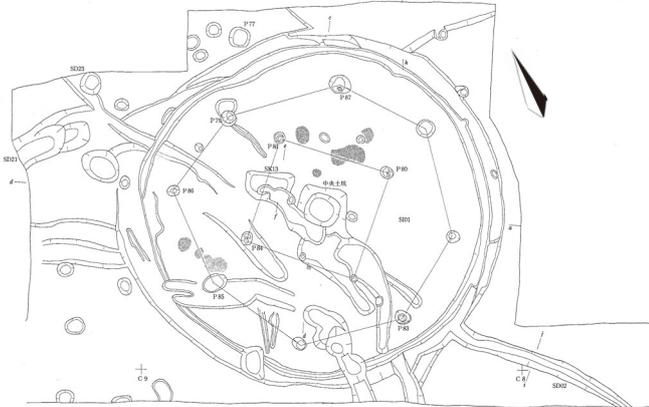
0 4m
(S=1/200)

下老子笹川遺跡 S I 10 (旧)



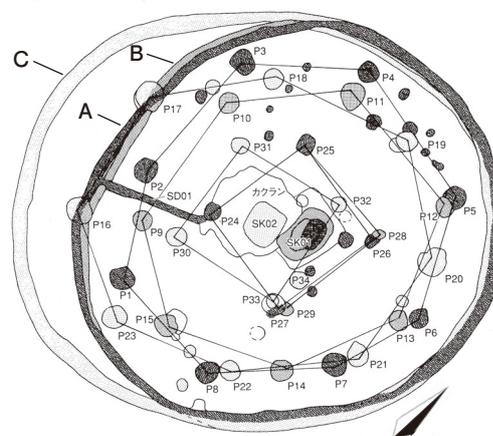
(報告書第二分冊 pp135 に加筆、外周溝除く)

一針 B 遺跡 S I 01



(報告書 pp17-18 に加筆)

八里向山 A 遺跡 S I 01



(報告書 pp105 に加筆)

図 11 弥生時代後期の大型住居

いたため明確でないが、後期前半 2 期には石川県小松市一針 B 遺跡 SI 01 (床面積 80㎡)、同県旭遺跡群 SI 64 (床面積 70㎡) などの事例があり、現状ではその出現期と考えたい。後期後半はさらに大型化した住居が確認され、本論では特大型住居と仮称する。従来は後期末に出現するものと考えられていたが、石川県白山市中奥・長竹遺跡 2 次 4 区 SI 01 (4 次 2 区 SI 01 と同一、床面積不明)、富山県では下老子笹川遺跡 B 5 地区 SI 01 (旧、床面積 98.4㎡) などの事例から、この段階に遡るものと判断される。後期末の特大型住居は事例も多く、石川県小松市八里向山 A 遺跡 SI 01 A~C (最終段階で床面積 114㎡)・SI 02 A (床面積 98㎡)、同県野々市町御経塚遺跡群デト地区 SI 02 (床面積 189㎡)、同県金沢市額谷遺跡 1995 年度調査区 SI 01 (床面積不明)、富山県射水市中山南遺跡 3 号住 [高橋 2005, 床面積不明] などの事例がある。また、大型住居には従来までの平面円形か多角形・多主柱のものに加え、平面 4 角形・4 本主柱のものが出現している。

弥生時代後期の住居について補足すると、大型住居の出現と相乗して規模は多様化するが、その区分は検討の対象とする地域空間を拡大し資料数が増えていくにつれて数値の境界域が曖昧になる傾向があることから、絶対的な差異ではなく、集落ないし小地域といった限定的な空間内での相対的な差異であり、厳密には分化していないものと予想している。また、住居の規模が機能・用途とどう対応するかについては、具体的な検討が少なく、不明な部分が多い。大型住居については、居住空間が広いこと以外では、石製玉をはじめとする生産性や焼失の頻度が中・小型住居よりもやや

高い様相を指摘できる程度に過ぎない。ただし、構造としては垂木の傾斜角度が中・小型住居と同等であると仮定するならば、屋根が高くなる外観は想定できる。特に前述した一針B遺跡や八里向山遺跡のような外側多主柱・内側4本主柱の二重配置をとる住居についてはさらに高層建築が可能であろう。それは冬季積雪時の出入口確保といった実用性もあろうが、集落内あるいは小地域内で象徴性が強い建物となる可能性がある。

(2) 遺構の配置

ここでは、前述した弥生時代中期と後期の代表的遺跡に加え、その他の有効な事例を引用しながら、集落の遺構配置について検討し、各時期の特徴と時間的な変化、空間的な変化を考えてみる。

中期前半は八日市地方遺跡とその他集落で大きく様相が異なることが特徴となる。前半1期は遺跡数が少ないため、遺構配置が明らかな集落は八日市地方遺跡のみである。この段階の八日市地方遺跡は小規模な集落ではあるが、河川沿いの居住域と、その周囲に環濠が確認されている。前半2期は遺跡数も増えており、集落の比較が可能となる。八日市地方遺跡は大規模な集落となり、環濠と区画溝が組み合わさって複数の居住域と墓域が配置されている。その他集落では、住居が距離を置いて散在する、最小の居住域は住居2～3棟の群で形成される、住居群には小規模な倉が付属する場合がある、住居に墓（土坑墓）が近接する事例が多い、といった比較的共通した様相を抽出することができる〔安2002〕。

中期後半は住居や倉の配置は前段階と大きく変わらないが環濠の確認例が多くなる。後半1期は中屋サワ遺跡の他、同じ石川県では羽咋市東の場タケノハナ遺跡、新潟県では佐渡市平田遺跡などが好例である。また、石川県金沢市松寺遺跡や同県七尾市細口源田山遺跡などでは方形周溝墓の独立的墓域が確認されており、居住域と墓域の分離傾向を示している。後半2期は遺跡数が少なくなるが、傾向は1期と同様と予想している。中屋サワ遺跡では環濠が再掘削されており、戸水B遺跡では確実に環濠が成立して機能している。石川県中能登町杉谷チャノバタケ遺跡C地区では丘陵部の急傾斜地に集落が営まれ、環濠が掘削されている。

後期前半は前半1期に遺跡数が少なく、遺構の配置が明らかな事例がないため、前半2期の様相で代表させたい。前半2期には西念・南新保遺跡と旭遺跡群で対照的な遺構配置が確認される。西念・南新保遺跡は河川近くに環濠と区画溝を巡らせ、居住域と墓域を配置する。これは中期の八日市地方遺跡と類似しており、その規模を縮小した内容となっている。旭遺跡群は大型住居を普遍的に含む居住域を分散させるが、環濠や墓域は持たない。その他集落は基本的にどちらかの類に含まれるものと考えているが、前者に墓域が存在しない場合や、後者に小規模な墓域が付属する場合など、墓域の様相による細分を想定しておきたい。倉の配置は中期と大きくは変わらない。

後期後半は住居や環濠の様相は前半と同様であるが、倉と墓域については変化が見られる。倉については前半と同様な集落と、大型・多棟傾向の明確な集落が確認できる。前者は旭遺跡群など、前半から継続する集落に目立つ。後者は新出の集落が多い。石川県では押野タチナカ遺跡や塚崎遺跡の他、金沢市桜田・示野中遺跡、富山県では上市町江上A遺跡などが相当する。江上A遺跡では限定的な調査区で居住域の周囲に検出された直線的な大溝SD 01が環濠と理解されているが、金沢市梅田B遺跡4次1区下層で検出された住居・倉・水路・区画溝の配置（図12）と類似しており、

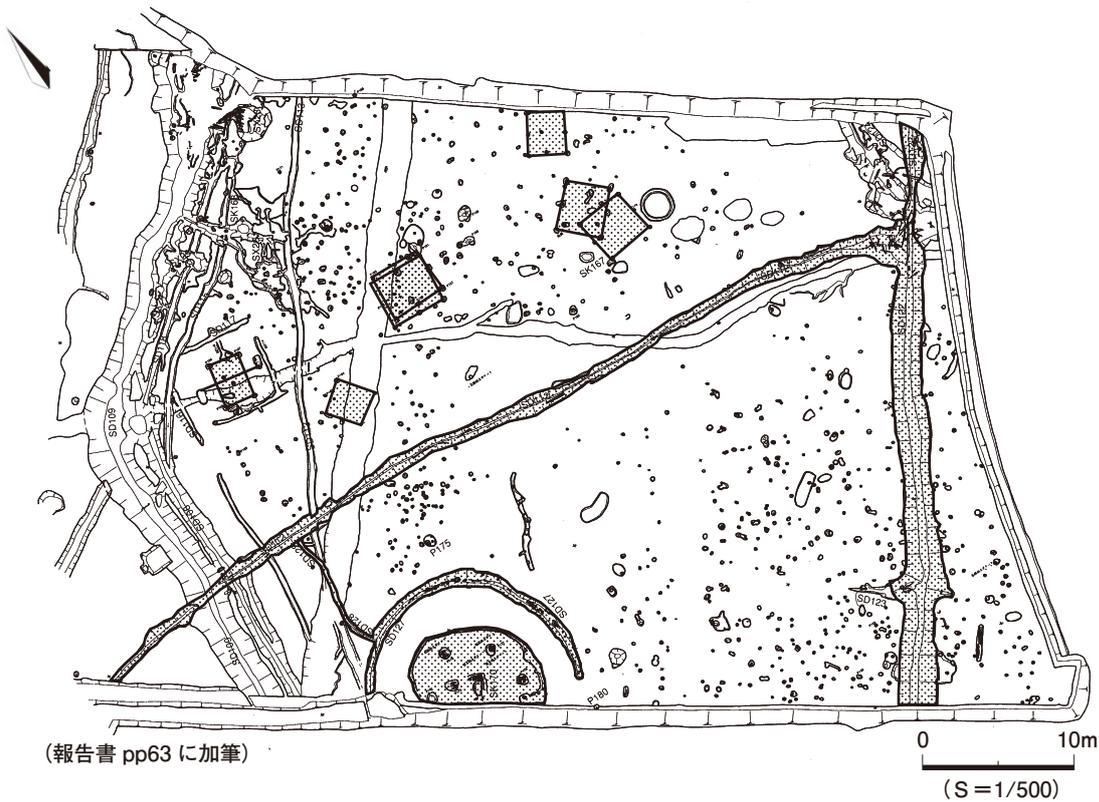


図12 梅田B遺跡4次1区下層の遺構配置

環濠としては積極的に評価できない。墓域は西念・南新保遺跡では存在しなくなっている。旭遺跡群では集落の北西端で方形周溝墓(SX16・17・28など)が構築され、過去の居住域を浸食する墓域化が開始される。同様の变化は古墳前期前半の御経塚シンデン遺跡でも確認されている。

後期末は住居が平面形・支柱配置の過渡期にあたるが、配置には大きな変化がない。環濠は確認例が減少しており、時期が降る事例は上越市釜蓋遺跡など新潟県に偏在する。倉と墓域については後半の傾向が加速する印象を受ける。特に倉については、御経塚シンデン遺跡や、住居が削平されて(SB 30など)過小に報告されている可能性があるが、石川県金沢市大友西遺跡のように大型・多棟傾向がさらに強まった集落が存在する。この類の集落は金沢市上荒屋遺跡、藤江C遺跡、新潟県村上市道端遺跡など、古墳前期前半に新出する集落でも確認することができる。ただし、御経塚遺跡群ツカダ地区など小型・小棟の集落も存在しているので、集落全てが変化するわけではない。

以上の動向から、集落の景観を規定する遺構配置は主に環濠、居住域、墓域と考えられる。遺構配置のまとめとして、これらの様相を組み合わせることによって集落の類型を設定しておきたい。居住域を構成する遺構の中では大型住居と倉が最も様相差が明確である。大型住居は後期の普遍的な要素であり、中期と後期を区分する指標となる。倉は後期に様相差が明確になるので、後期の類型を細分する要素とした。以下、環濠の有(A)・無(B)を基準とし、その他の要素で細分した大まかな類型を中期と後期の時期ごとに示しておく。なお、居住域については規模の大小という差もあるが、大規模なものは基本的に2~3棟程度の住居群が連続している可能性がある。小規模なものは八里向山D遺跡(後期末)など、住居1~2棟のみで集落が構成されているような事例もあるが、八里向山A遺跡など並存する近接集落と連携した存在であることが予想でき[安2008]、基本的に自立した集落とはいえない。よって、居住域の規模は類型に反映させなかった。墓域につい

ては変化の方向性は把握できたものの、環濠や居住域の変化と総合的に理解することができなかつたため、類型に反映されていない。

中期

A：環濠を持つ集落，環濠の出現時期と規模で細分する。

A 1：中期前半から環濠を持つ，複数の居住域と墓域を配置，該当するのは八日市地方遺跡。

A 2：中期後半から環濠を持つ，A 1に比べて小規模，該当するのは中屋サワ遺跡など。

B：環濠を持たない集落，規模は大小多様であり，遺構は散在配置。該当する遺跡は多い。

後期

A：環濠を持つ集落，該当するのは西念・南新保遺跡など。

B：環濠を持たない集落，倉の様相で細分する。

B 1：居住域に1棟かそれ以下の頻度で小型の倉を持つ集落，該当するのは旭遺跡群など。

B 2：居住域に大型か2棟以上の倉を持つ，住居の数は超えない，押野タチナカ遺跡など。

B 3：居住域に住居と同数かそれ以上の倉を持つ，該当するのは御経塚シンデン遺跡など。

⑤……………集落と地域

(1) 集落の関係性

前述した集落の類型は出現に時間差をもっており（表2），集落の関係性が注目される。ここではその推移をたどりながら各類型に該当する集落の関係性について考えたい。

中期はA 1類型の存在感がきわめて大きい。中期前半はA 1類型とB類型が存在する。A 1類型は現状では八日市地方遺跡のみであるが，集落規模は大きく，遺構配置も集中的であり，きわめて西日本的な集落景観である。A 1類型とB類型の差はきわめて大きい。中期後半にはA 1類型とB類型にA 2類型が加わる。A 1とA 2は後半1期に並存するが，A 1は後半2期には消失している。A 2は規模的にはA 1には及ばず，居住域の様相はBとほとんど変わらないことが予想され，環濠の有無を除けばA 2とBの差は小さい。石川県ではA 2とBが近接して並存する事例として，中屋

表2 集落類型の消長

	中期前半	後半	後期前半	後半	末
A 1	———	……………			
A 2		———	A	———	……………
B	———		B 1	———	
				B 2	———
					B 3

こまでの検討にならない、弥生時代中期、弥生時代後期の順に論述する。

弥生時代中期はA類型がB類型に対して優位性を持った社会を描画する。A1類型（八日市地方遺跡）は前半1期から明確な遺構配置を示して出現しており、B類型に対する優位性は歴然としていることから、前半2期から後半1期にかけて出現する多くの集落に強い影響を与えていることを想定したい。それは、点から線へ、線から面へと変化する集落分布とあわせて考えると、北陸に相当する地域に弥生時代の文化・社会が形成される過程において、物資や情報を交流させるといった主導的な役割を担っていたことを窺わせる。ただし、B類型も前半1期に出現している可能性があり、A1の分村が多数のBになるというような、単純な構図には適合しない。むしろ北陸各地域の在地的集団と西日本的な文化情報が結合した集落がBの主体であって、その仲介をした集落がA1と理解している。後半1期にはA2類型が出現し、後半2期にA1は消失するが、この段階にはA2にA1の要素が継承されていることから、A1が分村・移動して複数のA2を成立させた可能性がある。ただし、Bに対する優位性はA1よりかなり低下しているものと考えられる。

弥生時代後期はB類型がA類型に対して優位性を持っていく社会を描画する。後期前半2期の段階では、大型住居が出現したことにより、居住域の様相が変化している可能性はあるが、類型は中期後半2期の状況と変化していない。しかし、後期後半から後期末にかけては倉が大型・多棟化したB2類型、B3類型が加わっていく。倉の数は浜崎悟司が指摘する〔浜崎1993〕とおり、集落の優位性に直結する要素であり、倉の規模についても同様に理解している。B2はAとB1に対して優位性を持ち、B3は全てに対して優位性を持つ。A類型とB類型の関係はここに逆転するのである。注目すべきは、集落が増加する段階に優位性を持った類型が続々と出現する様相であろう。これは地域に複数の集落があり、その中に含まれるであろう、倉が大型・多棟化した集落が優位性を発揮するという構図であり、小地域においてその運営を担うといった主導的役割を持った集落を含む共同体が成立しており、しかも、段階を追って重層化していくことが確実視されよう。一方で、より巨視的には、地域に比較的同質の共同体が群在し、傑出した存在が生まれにくい構造となっていた状況を想定しておきたい。

⑥……………結論

以上、冒頭で示した手順に沿って北陸における弥生時代の集落と地域社会について検討してきた。簡潔に振り返りながら結びとしたい。なお、集成した集落については、条件を満たす事例が予想以上に少なかった。特に福井県域では引用できた事例もなく、地域的な偏りは免れない問題を残した。今後の報告に期待を寄せるものである。

検討の結果、集落の遺構配置については、大まかながら中期と後期で類型を設定できた。中期については、環濠の意義を強調する結果となった。また、A1類型とした八日市地方遺跡の存在感が大きいことを再確認した。八日市地方遺跡の重要性についてはあらためて述べるまでもないが、住居の型式など、遺構の報告を待って検討すべき点が多い。特に、きわめて高いとされる居住域の遺構密度については注目している。評価は分かれている〔秋山2005など〕が、集住形態といえるのか、あるいは単に長期間継続した結果であるのかなど、興味は尽きない。後期については、後期前半に

大型住居が出現、後期後半以降は倉の保有形態の多様化、と変化が進んでいく。環濠の意義は低下して、むしろ倉の重要性が増したようであり、中期とは異なった原理で編成された地域社会の姿を垣間見ることができた。大型住居の出現については、現状では中期と後期を区分する指標であり、もっと強調すべきかもしれないが、具体的に何が変化しているのかを明らかにするためには、住居の機能論をより深化させる必要性を痛感した。それは居住域の規模や詳細な構造を解明する上でも不可欠な作業であろう。

本論は北陸における弥生時代中期・後期の集落と地域社会について、大まかな輪郭を描いたものに過ぎないが、私は冒頭で述べた問題点を克服するための基礎作業と位置付けている。現時点では未報告の良好な事例もあり、近々の報告を待って、本格的な集落理論への昇華を期するものである。本論が今後、北陸地方における弥生時代の集落研究および地域社会研究を活性化させる一助となれば幸いである。

参考文献

- 秋山浩三 2005 「弥生大型集落断想（下）」『大阪文化財研究』第28号 財団法人大阪文化財センター pp18-21
- 岡本淳一郎 2006a 「第X章2 周溝をもつ建物の分類と系譜」『下老子笹川遺跡発掘調査報告』第五分冊 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 pp247-276
- 岡本淳一郎 2006b 「下老子笹川遺跡の弥生時代集落の変遷－集落景観の復元にむけて－」『富山考古学研究』紀要第9号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 pp27-36
- 景山和也 2005 「金沢市西念・南新保遺跡」『石川考古学研究会々誌』第48号 石川考古学研究会 pp31-44
- 楠 正勝 2007 「第4章第1節 弥生・古墳時代」『中屋サワ遺跡Ⅲ』金沢市（金沢市埋蔵文化財センター） pp216-219
- 小嶋芳孝 1992 「加賀地方における弥生後期社会の一様相」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会 pp541-551
- 高橋浩二 2005 「富山県における高地性集落の解体と古墳の出現」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会 pp215
- 高橋 保・斉藤基生・佐藤則行 1987 「58 下谷地遺跡」『柏崎市史資料集』考古篇1 柏崎市史編さん委員会 pp262
- 栃木英道 1999 「第2章25 塚崎遺跡」『金沢市史』資料編19 考古 金沢市 pp184-205
- 浜崎悟司 1993 「Ⅱ3 加賀の集落構造の推移」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会 pp111
- 安 英樹 2001 「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 財団法人石川県埋蔵文化財センター pp66-83
- 安 英樹 2002 「北陸の弥生集落概観」『フォーラム北陸における弥生都市－小松市八日市地方遺跡を検証する－』石川県小松市教育委員会 pp5-6
- 安 英樹 2005 「戸水B遺跡」『石川考古学研究会々誌』第48号 石川考古学研究会 pp3-30
- 安 英樹 2008 「2⑤ 北陸 高地性集落」『弥生時代の考古学』8 集落からよむ弥生社会 同成社 pp201・205
- 安 英樹・布尾和史 2005 「手取扇状地の遺跡動態」『中部弥生時代研究会第10回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会 pp31-36
- 安 英樹・山口欧志 2005 「弥生集落のGIS解析－石川県の事例から－」『世界の歴史空間を読む－GISを用いた文化・文明研究－』国際日本文化研究センター pp329
- 吉岡康暢 1978 「1二 瓊のムラからクニへ」『古代の地方史』4 東海・山陰・北陸篇 朝倉書店 pp33-36
- 渡邊裕之 2005 「新潟県における弥生建物」『弥生建物の地域性と系譜（中部弥生時代研究会第11回例会発表要旨集）』中部弥生時代研究会 pp32（追加資料）
-

(その他出典文献)

- 石川県金沢市教育委員会 1997『金沢市松寺遺跡(第2次)』
石川県金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2002『大友西遺跡Ⅱ』
石川県金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003『石川県金沢市上安原遺跡Ⅱ』
石川県金沢市 2004『金沢市史』通史編1 原始・古代・中世
石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター 2002a『金沢市藤江C遺跡Ⅳ・Ⅴ』
石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター 2002b『小松市一針B遺跡・一針C遺跡』
石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター 2004a『加賀市猫橋遺跡』
石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター 2004b『羽咋市東の場タケノハナ遺跡』
石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター 2007『金沢市梅田B遺跡Ⅲ』
石川県小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』
石川県小松市教育委員会 2004『八里向山遺跡群』
石川県七尾市教育委員会 1982『細口源田山遺跡』
石川県野々市町 2003『野々市町史』資料編1 考古 古代・中世
石川県野々市町教育委員会 1989『押野タチナカ・押野大塚遺跡』
石川県野々市町教育委員会 2001『御経塚シンデン遺跡 御経塚シンデン古墳群』
石川県羽咋市教育委員会 1999『史跡 吉崎・次場遺跡整備事業報告書』
石川県松任市教育委員会 1995a『旭遺跡群』
石川県松任市教育委員会 1995b『松任市野本遺跡』
石川県松任市教育委員会 2000『松任市中奥・長竹遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1998『金沢市額谷遺跡』
財団法人石川県埋蔵文化財センター 2000a『金沢市戸水C遺跡・戸水C古墳群(第9・10次)』
財団法人石川県埋蔵文化財センター 2000b『松任市相川新遺跡』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』
富山県上市町教育委員会 1981『北陸自動車道遺跡調査報告-上市町遺構編-』
富山県高岡市教育委員会 2001『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000『県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅶ
道端遺跡Ⅲ』
新潟県上越市教育委員会 2008『釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』

(石川県埋蔵文化財センター, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年10月31日受理, 2008年12月5日審査終了)

The Settlement of the Middle and Late Yayoi Period in Hokuriku

YASU Hideki

There is little research on Yayoi settlements in Hokuriku that encompasses the entire region or the entire period, nor is there active research on this topic. With the aim of surmounting these problems, this paper examines the structure of settlements by gathering together useful studies mainly of the Middle and Late stages of the Yayoi period and considering the location of relics. By looking also at the distribution of settlements in the region, this study investigated inter-settlement relationships. Based on these findings, the author then attempted to speculate about society during that period.

In Middle Yayoi, settlements made up of a number of dwellings appeared in low-lying areas, thus creating the basic model for an agricultural settlement. Basic settlements were formed in the first half of Middle Yayoi, and the extremely strong influence of the moated settlement found at the Youkaichi Jikata Site in Komatsu City in Ishikawa Prefecture made moated settlements (A1-type settlements) dominant over those without moats (B-type settlements). A1-type settlements waned in the latter half of Middle Yayoi, and although elements from this settlement were adopted elsewhere (A2-type settlements), the dominance of moated settlements declined.

In the first half of Late Yayoi, the appearance of large dwellings marked a distinct change from Middle Yayoi. From the latter half through to the end of Late Yayoi, there was diversification in storehouses mainly in settlements without moats and the character of settlements gradually became stratified. At this stage, a settlement's dominance was not based on whether or not it had a moat, but on whether it had large or many storehouses. It was the dominant settlements that led communities in homogeneous areas.

As a result of the Middle Yayoi emphasis on whether or not a settlement had a moat and the emphasis in Late Yayoi on large dwellings and storehouses, the law that formed a local settlement changed. In conclusion, from Middle Yayoi, which led the formation of culture in the Yayoi period, A1-type settlements changed to become the relatively homogeneous communities that were formed in Late Yayoi society.

Key words : Middle Yayoi, Late Yayoi, moat, large dwelling, storehouse, type
